

会員各位

平成24年8月1日

協会だより236(8月号)

触媒資源化協会

<トピックス>

- 第214回月例会（見学会と暑気払い）の開催（8月10日までにご返答ください）
日 時：9月3日（月）14：00～15：30（見学）
場 所：花王㈱東京工場
集号場所と時間：JR総武線亀戸駅北口 13：30までに



- 一. 協会よりのお知らせ
【実施済事項】 【予定事項】
- 二. 経産省よりの連絡
- 三. 第二十三回月例会の報告
- 四. スイジン会（OB会）開催
- 五. 事務局より（八月度の予定）
- 六. 【雑字】奥の細道・バスツアー“

1. 協会よりのお知らせ

【実施済事項】

- ① 協会だよりー235（7月号）をメール&郵便で送信（7／2）
- ② 第213回月例会（講演会・懇親会）
日 時：7月13日（金）14時～19時
場 所：ニュー新橋ビル・ホール（新橋）
演題1：有機エレクトロルミネッセンス
講師 今野 英雄氏（産業技術総合研究所）
演題2：バイオマス・リファイナリー
講師 富永 健一氏（産業技術総合研究所）
懇親会場：養老の瀧 新橋烏森口店にて
- ③ 第214回月例会（見学会）幹事会及び第二回運営委員会
日 時：7月19日（木）14時30分～17時00分
場 所：堺化学工業㈱会議室
出 席：幹事会（14：30～15：30）

(株)光正、三菱マテリアル(株)、東京化学開発(株)、日揮触媒化成(株)、事務局
出席：運営委員会(15:30～17:00)

運営委員、第214回月例会幹事会社、事務局

[予定事項]

① 第214回月例会(見学会)

日時：9月3日(月) 14:00～15:30

場所：花王(株)東京工場

集号場所と時間：JR総武線亀戸駅北口 13:30までに

2. 経産省よりの連絡

- ・7/5 担当者一部変更のお知らせ(経済産業省化学課/環境保全・化学品安全班)
課長補佐 永田令子さんに代わり 係長 石川 幸司さん(ishikawa-koji@meti.go.jp、
個人内線 77159) が業務を引き継ぎます。
- ・7/12 大雨による被害状況調べ(経済産業省化学課)
- ・7/20 エネルギー・環境の選択肢に関する国民的議論の進め方について

3. 第213回月例会の報告

初夏と言えんばかりの暑さの中、2012年度初めての月例会がニュー新橋ビル・ニュー新ホールにて行われました。冒頭、触媒資源化協会の新会長である大藤俊洋様からも「日本が技術立国として生き延びるための必須の技術分野についてのご講演」というお話もありここ最近苦戦を強いられている「MADE IN JAPAN」のヒントを頂くべく期待を持って会がスタートしました。

今回は幹事会社株式会社フルヤ金属様のご努力により独立行政法人産業技術総合研究所(以下、産総研)環境化学技術研究部門 精密有機反応制御グループよりお二人の先生がご講演いただけることになりました。産総研は皆さまご存知の方も多いと思いますが、基礎研究から製品化研究までの幅広い連続した本格研究を通じて、大学と産業界をつなぎ、国内産業の活性化に一役買っている専門家集団でございます。

今回、前半でご講演頂いた今野英雄様は、埼玉大学出身で米国で研究を重ねてこられた方でして「有機 EL 素子と有機材料～りん光材料の製法開発～」というタイトルでご講演頂きました。「有機 EL とは？」という前段のご説明から有機 EL が発光する仕組みや、各国の開発状況や優位性、韓国勢が優位という世界シェア争いに向けての開発競争の状況等についても触れて頂きました。昨今の韓国勢優位という状態は変わり無いですが、素子として提供している材料の大部分は実は日本のシェアが高く、中身は日本製といっても過言ではないというお話も聞けまして、若干ほっとした気分になりました。とはいえ、かつて日本がリードしていた有機 EL 分野の実用化について「油断が出来る状態ではない、これからの開発がキーである」というようなお話もあり益々の技術開発の重要性を改めて考えさせられた内容でした。

また、副題にもありましたとおり、有機 EL はまだまだ完成形ではない分野であり、素子やりん光材料(Red、Green、Blue)のより一層高効率な開発の為に、ノーベル賞の鈴木カップリングを使用する話や材料評価の仕組みについてもお話がありまして、継続した検討が必要であるという話もありました。今後の日本の電機産業や国力を試される意味で非常に興味を惹かれる内容でした。

また、触媒、希少金属という意味では、現在はイリジウムを使用してりん光材料を製造することが主流であるという話もあり、今後の資源の枯渇や他国からの入手困難な状況により開発スピードが遅れてしまうのではないかとこの受講者からの質問が出るなどこれからの円高、資源不足においても注意をすべきという質問、意見も頂きました。(九州大学でイリジウム錯体を使用せずにりん光材料を製造する研究をしているというお話もありました。)

つづきまして後半は、精密有機反応制御第3グループのグループ長である富永健一様から「レブリン酸を基幹物質としたバイオマスリファイナリー」というタイトルでご講演頂きました。東京工業大学のご卒業で、バイオマス反応について研究を重ねてこられた方です。昨今問題になっている原油の枯渇に対し石を投じる技術という事で、石油化学製品(エチレン、プロピレン、酢酸など)を製造するにあたり、石油精製(オイルリファイナリー)ではなく、バイオマスリファイナリーがこれからの時代に求められているという内容でした。

世界のバイオマス利用はパワー、燃料、製品に分けられ、今回のご講演は主に「製品」に関する分野についてお話頂きました。バイオマスから化学製品を製造する事が出来れば世界の温暖化や資源枯渇問題に解決の糸口を見つけられるという趣旨で、合成法については、従来は酸による合成が多かったようですがハイブリッド酸という名称の「酸触媒」を使用するとより有効に合成が可能になるということでした。受講者からも、「バイオマスによる石油資源代替」と食との関係性への配慮という話を良く聞くがその辺りの競合は無いのか?というご質問も出ましたが、コーンやサトウキビといった可食食品では無く、非可食のパーム椰子殻などが想定されているということであったため今後期待できる技術であると感じました。また、技術の現実性としてレブリン酸の合成は0.33円/kg程度で可能であり、従来方式の硫酸法であれば現行の原油由来の製法と対等に闘えるとの話もあり実用化、一般化もそう遠くないというお話でした。これからの技術の発展に大いに期待が持てる内容でございました。

今回お話頂いた内容は、まさに私たちの身近な娯楽(テレビ)、携帯電話、エネルギー、資源といった「過去優位に位置し、今他国に負けられない技術」という直面した戦いにどう挑んでいくか、またエネルギー資源の枯渇にどう立ち向かっていくかを考えさせられる内容でありこれからも動向について注視していきたい分野であると改めて感じさせられました。最後になりましたが、幹事会社、運営会社の皆様、触媒資源化協会小林専務理事、関係者の皆様には深くお礼申し上げます。誠にありがとうございました。



記：アミタ(株) 田部井進一

4. スイジン会 (OB会) 開催

7月10日(火) 15:00より 養老の瀧 新橋烏森口店で協会OB会が9名出席で一昨年以来、二年ぶりに開催されました。

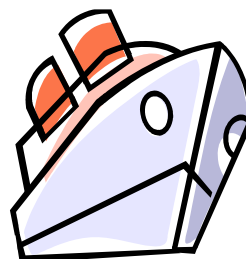
前列右より川原晋氏(日揮化学(株)OB)、西川久雄氏(触媒化成工業(株)OB)、安藤泰隆氏(触媒化成工業(株)OB)、小林尚道(日本無機化学工業(株)OB)、後列右より佐渡右幸氏(エヌ・イーケムキャット(株)OB)、三浦良雄氏(中外鉱業(株)OB)、鶴岡武氏(アジア物性材料(株)会長)、黒田英夫氏(株徳力本店 OB)、清水進氏(田中貴金属工業(株)OB)です。メンバーで最高齢の黒田さんは誕生日が来ると85歳とのことですが、話題豊富でことのほかお元気な様子でした。皆さん創立時の協会の様子などで盛り上がりあったという間の二時間でしたが次回再会を約して解散となりました。



5. 事務局より (8月度の予定)

曜日	月	火	水	木	金	土
1週	7/30	7/31	1	2	3	4
	○	○	○	×	○	×
2週	6	7	8	9	10	11
	×	○	△(午前)	夏季休暇	⇔	⇔
3週	13	14	15	16	17	18
	⇔	⇔	⇔	×	○	×
4週	20	21	22	23	24	25
	×	○	×	×	○	×
5週	27	28	29	30	31	9/1
	×	○	×	×	○	×

事務局延べ出勤予定：9日(○；終日、△；半日、×は休日)。



6. 【雑学】奥の細道・バスツアー（6-1）

奥の細道ツアーも延べ六回目となり、バスは今回のスタート地点・福島県二本松市に向かいました。前回の旅・郡山からのバトンタッチでツアー回数を重ねるたびに東京よりどんどん遠くになります。東北自動車道を通行中、郡山を過ぎ、二本松インターにいたる途中、他に住宅の見当たらない原野に大震災による二本松の仮設住宅群が現れ、この町外れにあるとは住んでいる人の心は如何なものかと案じられます。私達は二本松インターを降り亀谷坂頂上にある亀谷観音堂に向かいます。芭蕉さんもここを訪れたと云われています。ここには「春鏡塚」という句碑があり“人も見ぬ 春や鏡の 裏の梅”と刻まれており、芭蕉と芭蕉一門が開いた句会の連句の一つと云われています。



この亀谷坂には時代が明治の世で奥の細道から離れますが、幸田露伴が後日文豪として露伴を名乗った謂れの碑があります。露伴は当時 20 歳、電信技士として勤務していた北海道余市の電信所から職を放棄して逃亡し東京へ向かいました。青森、盛岡、仙台とやっと旅をしてきましたが福島に着いた所、当時は上野から郡山までしか鉄道が無く、郡山からの汽車賃を確保すべく福島から郡山まで夜を通して歩く決心をします。夜中、この二本松・亀谷坂に到達したとき、睡魔が襲い道に大の字になり、露と伴に野宿をしてしまったようです。これがペンネーム“露伴”の謂れと云われています。これらの旅行の結末は露伴の“突貫紀行”という日記風の短編に収められています。

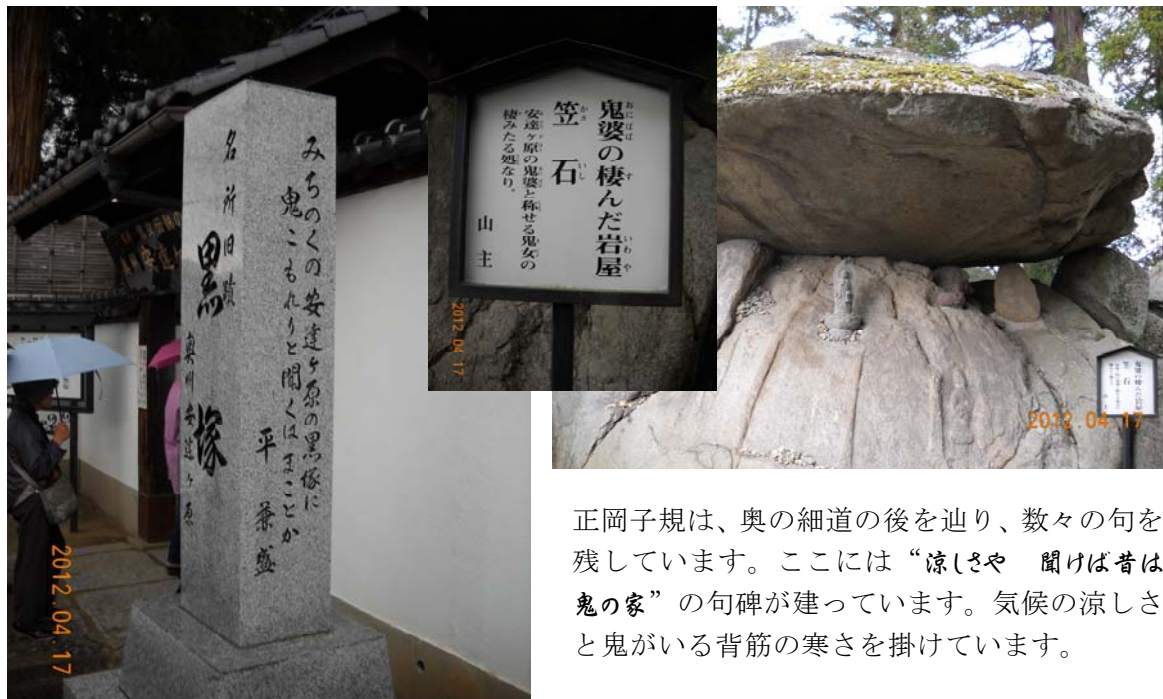


さてもう 12 時に近く、次の見学より先ずは昼食と、バスは道の駅「安達」に入りました。地元の野菜をふんだんに使った昼食バイキングは味も良く、アイス、コーヒー付きで 1300 円は誠にお得で満足感一杯でした。腹一杯になった私たちは、小雨の中を奥の細道ツアーに戻り、鬼婆伝説・安達が原“黒塚”に向かいます。

【黒塚（観世寺）】二本松市安達が原 4-126

お寺の境内にある黒塚の岩屋は鬼婆が住み、旅人を殺めたという伝説があるところです。伝説は平兼盛の歌“みちのくの 安達が原の黒塚に 鬼こもれり 聞くはまことか”に由来し、謡曲「黒塚」では安達が原の鬼女になったといわれています。

都より離れた東北は未開の地であったようです。まずは写真を紹介します。



正岡子規は、奥の細道の後を辿り、数々の句を残しています。ここには“涼しさや 聞けば昔は鬼の家”の句碑が建っています。気候の涼しさと鬼がいる背筋の寒さを掛けています。

【文知摺石】福島市山口字寺前5

しのぶもじずりの布は乱れ模様が尊重され、信夫の名産となり、しのぶは忍ぶ、みだれと歌枕に用いられました。この石も安洞院というお寺の境内にあります。昔恋しい人の面影を求めて、乙女が草の葉などをこの石に擦り付け人影を求める鏡石として扱われた伝説があります。奥州に赴任していた源融(河原左大臣)と地元・虎女との悲恋物語があります。地元の女性と仲良くなった源融は都に戻ることで、すぐに迎に来るよと言いながらも、なかなか迎に来ない彼氏に虎女は悲観し井戸に身を投げたといわれています。

百人一首には河原左大臣として“みちのくの (しのぶ) ぢずり たれゆえにみだれそめにし われならなくに”が載せられています。

安洞院の境内は広く、ここにも子規は立ち寄って句を詠んでいます。

“涼しさの 昔をかたれ 惹摺”安洞院の門前には芭蕉さんの石像が建っています。

奥の細道では“早苗とる 手もとや昔 しのお摺”ですが、現在芭蕉の直筆といわれる懐紙には“早苗つかむ てもとやむかし 志のお摺”はせおとあり、**摺む**と取るの語感を判断して変更したものと思われます。



石はあまりに大きく全体像が撮れなかった



安洞院の門前にある芭蕉さんの銅像。横山住職の弁舌さわやかな説明に爆笑したり、感心したりの一時間でした。参加したメンバーの最高年者に直筆の懐紙コピーがプレゼントされました。小林も男性の参加者中最高年齢ということでいただきました。



福島県を北上する阿武隈川はここ福島市の中心を大きく蛇行して流れています。阿武隈川に架かる橋を渡り、私たちは今夜の宿「飯坂温泉」ホテル聚楽を目指しバスは進みます。奥の細道には飯塚温泉と記載していますが飯坂温泉のことです。



福島交通飯坂線飯坂温泉駅



芭蕉さんは、飯坂で泊まった宿が良くなかったらしく奥の細道には、こう書いています。～その夜、飯塚にとまる。温泉あれば湯に入りて宿をかるに、土坐に筵を敷きあやしき貧家なり～。摺上川の川岸近くに芭蕉さんが泊まったと言われる滝の湯跡におくの細道碑があります。設備は良くなかったかもしれませんが、滝の湯は湯元であったようですから、地熱温度が高く筵を敷いて体を温めるオンドル形式ではないかと私は思うのです。



また当時は外湯が多かったことから、芭蕉さんの入浴した温泉は共同浴場と考えられます。それは鯖湖湯であったのでしょうか。



芭蕉と曾良の入浴の地の碑と復元した鯖湖湯

ツアーでは、一泊の翌日は医王寺を見学して、国見町に向かい伊達の大木戸を見る予定でしたが、協会のHPサーバーが満杯との連絡があり、朝、福島駅より新幹線を利用し東京に帰り、事務所出勤と相成り見学できませんでした。残念！

宿で同室した佐々木さんより、翌日の見学した写真をメールで頂いております。

【文責・専務理事】